



## 現代の社会問題のための聖書解釈手法へのアプローチ（前編）

著者	木原 桂二
雑誌名	関西学院大学キリスト教と文化研究
号	22
ページ	57-71
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029454">http://hdl.handle.net/10236/00029454</a>

# 現代の社会問題のための聖書解釈手法への アプローチ（前編）

木 原 桂 二

## 1. 序

### 1. 1. 本論文の目的

聖書を読む目的は何であり、何に役立てようとするのか—このことを追及すれば、数限りない答えに遭遇することになるだろう。キリスト教の信仰者でない人の中には、古典文学として読む人もいれば、知的好奇心に駆り立てられて読む人もいる。信仰者であれば、自らの信仰心を養い育てるための糧にしようとするに違いない。聖書とはいっても一冊の本であるから、その読み方に関しては自由であり、万人に共通の解釈方法は存在しないのである。

それゆえ本論文において提案しようとする解釈方法は、あくまでも一例にすぎない。この方法論に従わない解釈は間違っているとか、手続上の不備があると主張するつもりもない。しかし大学という研究機関において学問的な提案をする限りにおいて、それは共有可能な解釈方法であるべきと考える。言い換えるなら、本論文の提案と同じ方法を用いれば、その解釈の妥当性を誰もが検証できる提案でなければならないということである<sup>1</sup>。

---

1 しばしば「聖書解釈は万人にとって自由なものである」という主張と「聖書解釈には客観性が求められる」という主張の対立が見られる。しかし私見によれば、どちらも正しい。その論拠は次のように説明できる。たとえば「ヨハネ黙示録の記述は20世紀に起きた事件を予言している」という解釈について考えてみよう (R. E. Brown, *An Introduction to the New Testament*, New York: Doubleday, 1997, p. 773は、これまでに登場したこの種の解釈を批判的に列挙している)。その解釈は自由なものとして認められるかと問われれば、答えは「認められる」のである。なぜなら、人が頭の中で何を考えようとも完全に自由だからである。しかし

この前提を基に議論を進めていくが、最初に聖書解釈の目的を明確にしておきたい。本論文のタイトルが示しているように、聖書を解釈するのは当然として、その解釈を現代の聖書読者の社会問題に適用する段階まで突き詰めることが、われわれの目標である。はたして、このことを目指す上で、どのような問題が立ちはだかっているだろうか。

## 1. 2. 問題の所在

聖書はキリスト教という宗教の正典であると同時に、古代の文書である。それゆえ聖書読者の大多数にとって、聖書の言語や文化的背景のほとんどすべてが異質なものである。現代人であるわれわれが、この書物の内容を直感的に理解することは不可能と言ってよい。聖書読者は、テキストに内包されている時間的・空間的・文化的な隔たりを感じながら理解に努めているのである。

しかし聖書理解に関するこうした困難を感じながらも、聖書読者は自らの置かれている時代状況やそこに存在している諸問題に向き合い、できれば解決のヒントになるような答えを聖書に求めようとしている。それは知的好奇心で聖書を読む人にとっても決して例外ではないであろう。聖書によって得られた知識が自分自身、さらには自分を取り巻く社会状況に少しでも意味があると感じなければ、聖書の内容に興味を抱く必然性はないと思われるからである。

そこで、古代文献としての聖書と、それに向き合う現代人の間にある深い溝を、どうすれば埋められるかが問題になる。この点について、もう少し具体的に述べよう。

われわれは核（兵器・廃棄物）問題、化学物質による環境汚染の問題に直面

---

ヨハネ黙示録の予言云々の話が出版物のような形で公表される場合、あるいは教会の説教者が聴衆に向けて解釈を披露する場合には話が異なる。それを見聞きした人々が、その信憑性について客観的に検証し始めるからである。その場合、「1世紀末頃に成立した文書の著者は、自らの同時代人に向けて何かを語ろうとしたのであり、20世紀の出来事を知る由もない」と言えば簡単に解決する。つまり、この例で指摘したいのは、聖書解釈が人々の間で共有されるためには歴史的検証が説得力を持つということである。もちろん、テキスト解釈のためには文脈や物語に関する考慮も必要であるが、歴史的視点の考察は解釈の前提として必要最低限の要素なのである。

している。また、差別に関する諸問題や貧富の格差の問題にも直面している。前者は明らかに近現代特有の問題であるが、後者については、程度や形の違いがあるにせよ類似の事例を聖書テキストに見出すことは難しくない。しかしそれでも、数千年の開きと文化的・政治的相違を考慮すれば、単純に全く同じ問題であると見なすことはできないだろう。

つまりわれわれは、聖書が記された当時の人びとが想像し得なかった問題に向き合っているかもしれないのである。では一体、どうすれば聖書解釈を現代の諸問題に適用できるだろうか。

### 1. 3. 従来の研究方法の概観と問題点

これまで、現代社会の課題に適用させる聖書解釈として、どのような方法が用いられてきたのだろうか。

日本では、1996年に『現代聖書講座』<sup>2</sup>という論文集が全3巻にて出版された。ここでなぜ、このシリーズを取り上げたかと言えば、それは同書が聖書解釈を現代の課題を見据えたものにするという、われわれの関心に近いと判断できるからである。

各巻の書名を見れば分かるように、第1巻では、聖書テキスト自体の地理的・歴史的・文化的・社会的背景が論述され、続く第2巻では、聖書テキストの歴史批評（通時的）や文学批評（共時的）の方法論や課題が詳述されている。その上で、第3巻では「聖書の思想と現代」というタイトルが示され、古代文献の思想が現代のそれへとつながっていくように構成されている。そのような意味において、同書は本論文の主題との類似性があると判断できる。

しかしながら同書は旧新約聖書含め、多数の執筆者がそれぞれ独自の視点で論述する体裁となっているが、聖書の時代と現代をつなぐ接点について、それ

---

2 『現代聖書講座 第1巻 聖書の風土・歴史・社会』（月本昭男／小林稔編）日本基督教団出版局、1996年；『現代聖書講座 第2巻 聖書学の方法と諸問題』（木幡藤子／青野太潮編）日本基督教団出版局、1996年；『現代聖書講座 第3巻 聖書の思想と現代』（木田献一／荒井献編）日本基督教団出版局、1996年。

ほど踏み込んだ内容にはなっていない。第3巻の内容は二部構成であり、第一部が「旧約聖書の現代性」(傍点筆者)、第二部が「新約聖書の現代性」(傍点筆者)として、聖書と現代のつながりが示唆的なレベルにとどまっている。その点において、聖書解釈を現代の社会的課題に適用させるには不十分な論考であると言わざるを得ない。

もっとも、著者の一人である絹川久子はフェミニスト解釈によって、かなり踏み込んだ聖書解釈方法を提案している<sup>3</sup>。しかしわれわれの方法論を構築する際に、絹川の提案を参照したり取り入れたりすることはしない。なぜならわれわれは、現代の課題を事前に提示する聖書解釈手法を拒否したいからである。言い換えれば、現代の課題を念頭に置いたままで聖書を解釈しないということになる。

ただし誤解のないように申し添えておくと、絹川の手法が間違っているとか、フェミニスト解釈に言及する必要がないと主張しているのではない。そうではなくて、われわれは聖書から現代の諸問題という流れで解釈したいのである。方法論に関する重要な問題になるので、この点について、もう少し詳しく言及しておきたい。

古代文献である聖書は時代を超えてわれわれに何かを語りかけており、現代人はその置かれた状況の中で多様な解釈を施している。その際、聖書テキストは、現代人の解釈に対抗できる手段を持っていない。聖書の著者は、われわれの解釈に対して反論・弁明・補足をすることはできないのである。たとえば、ある現代人が聖書著者の主張に反することや的外れな解釈をした挙句に、これこそが聖書のメッセージであると声高らかに叫んだとしても、聖書の著者はその解釈の誤りや見当違いを指摘したり、本来の趣旨を説明したりすることはできないのである。

そういう意味で、現代人は聖書テキストよりも優位に立ち、聖書について自由奔放に語ることができてしまうと言える。その結果、自分の解釈を聖書に押し付けてしまう危険性があるがゆえに、われわれはこのことを強く警戒するの

3 絹川久子「聖書テキストのフェミニスト解釈」、第3巻、255-278頁。

である<sup>4</sup>。特に現代の社会的な諸問題の解決につながるヒントを得たい場合に、その問題に直接的に関わるテーマが聖書のどこかにないかと探してしまうことがある。もちろん、その行為が間違っていると主張したいわけではない。それが本当の意味で聖書を読むことになるかどうかを問いたいのである。なぜならその行為には、明確な恣意性が混入せざるを得ないからである。

われわれは、このような危険性を回避するためにも「聖書から」という姿勢を貫きたいが、この方法が聖書を絶対視するものではないことを付け加えておきたい。聖書は古代文献であると同時に宗教文書でもある。それゆえ聖書に書いてあり、聖書が主張していることを、正しい倫理観に基づくものであると無前提に判断してしまう場合がある。しかし、そのような態度には危険性が潜んでいることを理解しておかねばならない。

この点については、「聖典と今日の課題」をテーマにしたRCCのプロジェクトの研究会における発表の記録として公開されている小林昭博の主張が極めて明快なので是非とも参照して頂きたい<sup>5</sup>。小林の主張を要約すれば、概ね以下のようなことになる。

しばしば「聖書に書いてあるから」という理由で、自らの差別的な倫理観（たとえば同性愛を罪とする思想）を正当化しようとする人びとが見られる。では、そういう人たちが聖書に書いてあることを漏れなく実行しているかと言えばそうではなく、自分たちの判断で実行したり実行しなかったりする場合があるというのである。

たとえば小林は、明らかな女性差別を示す一コリント14:33b-35の勧めが現代の教会では実践されていない事実を指摘する<sup>6</sup>。つまりこの事実は、たとえ聖書に書いてあることであっても、現代人の倫理的感覚にそぐわなければ考慮され

4 もっとも、絹川はこの危険性を承知の上で慎重に議論を進めていると感じられる。しかしわれわれは、その危険な橋を渡らないで済ませられる解釈方法を模索したい。

5 小林昭博『「聖書に書いてあるから」というのが本当の理由なのだろうかー同性愛を罪とする聖書テキストを読む』『聖典と現代社会の諸問題 聖典の現代的解釈と提言』（関西学院大学キリスト教と文化研究センター編）、キリスト新聞社、2011年、9-65頁。

6 小林「聖書に書いてあるから」、55-59頁参照。

ないことを示している。このように、聖書を規範にすると主張する人たちも、実際には自分たちの都合に合わせて聖書の中身を取捨選択しているというわけである<sup>7</sup>。

このことを確認した上で、われわれが模索しようとする解釈の方法論に戻りたい。聖書を読んで解釈し、その結論を現代社会の諸問題に適用したいと考える時、われわれの倫理的先入観とも言うべきものを聖書に押し付けてしまう危険性が付きまとう。そうならないために、われわれはどのような解釈を求めるべきであろうか。「聖書から」という形で聖書を出発点とした解釈を施す場合、その聖書からのメッセージは、現代の社会的諸問題に届くものとして機能するのだろうか。

## 2. 聖書翻訳の問題<sup>8</sup>

序において述べたように、われわれは現代社会の諸問題に向き合うためのヒントを聖書に見出す解釈方法を模索しようとしている。しかしわれわれは最終目標となる「現代の社会問題へのアプローチ」については、とりあえず封印した上で聖書解釈に集中したい。

7 辻学「第一回研究会 聖書—歴史的読み方の限界と可能性」『聖書の解釈と正典 開かれた「読み」を目指して』（関西学院大学キリスト教と文化研究センター編）、キリスト新聞社、2007年、13-19頁は、自分の都合に合わせた聖書解釈が、聖書を規範にすると主張する人たちだけでなく、「歴史的批判的研究」によって解釈する人にも見られると指摘している。客観的な読みを標榜する学術的解釈方法が解釈の恣意性を隠蔽する道具になり得る危険性があることを、われわれは認識しておかなければならない。

8 本論文においては聖書解釈の第一段階として「翻訳」を取り上げているが、本来的にはその前に、聖書本文を確定するための「本文批評」を行う必要がある。旧新約を含めすべての文書のオリジナルテキストは失われており、至る箇所に異読の見られる複数の写本のみが現存しているからである。現在、緻密な学問的作業の成果としてオリジナル原典テキストの復元を目指した校訂本が出版されているが、当然のことながら、原著者が執筆したテキストと一致するとは限らない。あくまでも仮説にすぎないので、翻訳者は校訂本を底本として用いることを前提にするか、もしくは独自の判断で、それとは別の読みを提案することになる。しかし、そのための作業方法については有用な参考文献が出版されているので、改めてここで説明する必要はないであろう。新約聖書に限定されるが、以下の文献を参照されたい。蛭沼寿雄『新約本文学史 蛭沼寿雄選集 第3巻』新教出版社、2011年；エーバハルト・ギュー

当然のことであるが「現代の課題から聖書へ」という方向性で解釈する人は、たとえば核問題というテーマ設定をする場合に、聖書が書かれた時代に核問題どころか放射性物質なるものが存在していることすら知られていなかったことを十分に弁えているはずである。では、なぜこのようなアプローチが可能であるかと言えば、核問題という人類にとっての「特殊な課題」を追及するためのヒントを、聖書が語る人類の「普遍的な課題」が応答すると確信しているからに違いない<sup>9</sup>。それゆえ「特殊的な状況に対する普遍的な解決を求める」という方法を否定する必要はなく、むしろ従来通り行われるべきものとする。

しかし、それでもわれわれはあえて「聖書から」という方向性を選択したい。なぜなら古代文献である聖書を、古代文献として読むことに困難を覚えるからである。言い換えるならば、聖書を読むという作業は決して簡単ではないのである。もちろん、すでに世界中に優れた翻訳が出回っているのも簡単に読めるのではないかと反論する人がいるに違いない。だが後述するように、翻訳されたものである限り、どんな優れた翻訳であっても古代文献そのものではない。翻訳には、現代人が理解し得るものにするという目標があるがゆえの、いわば宿命とも言える制約がある<sup>10</sup>。そこで、その制約とは何であるのか、またそれをどのように克服すべきかについて考えたい。

## 2.1. 古代語を現代語に訳す際に生じる問題

聖書は古代文献であり、古代の言語で書かれたものであるから、現代の言語に翻訳されなければならない。学問的な事情によって、あえて別の古代語に訳

ティンゲ『新約聖書の「本文」とは何か』（前川裕訳）新教出版社、2012年；前川裕「本文批評」浅野淳博（他）『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局、2016年、20-53頁；D. A. Black, *New Testament Textual Criticism: A Concise Guide*, Grand Rapids: Baker, 1994；J. H. Greenlee, *Introduction to New Testament Textual Criticism*, Rev. ed., Peabody, MA: Hendrickson, 1995；P. D. Wegner, *A Student's Guide to Textual Criticism of the Bible: Its History, Methods and Results*, Downers Grove, IL: Inter Varsity, 2006.

9 たとえば、『科学技術とキリスト教』（富阪キリスト教センター編）新教出版社、1999年を参照されたい。

10 この問題については、柳父章『「ゴッド」は神か上帝か』岩波書店、2001年が、聖書を中国語に翻訳したロバート・モリソン宣教師の働きを通して具体的に論じている。



す研究者がいるかもしれないが、基本的に現代人が読むための翻訳が求められる。それゆえ、この翻訳された聖書を理解しさえすれば、現代人にとって必要なメッセージを受け取ることができ、必要に応じてそれを現代の社会問題に適用できると考える人がいるかもしれない。

しかし、そのように単純に考えることはできない。なぜなら現代語に翻訳された聖書は、あくまでも現代化された聖書にすぎないからである。言い換えるなら、聖書を執筆した古代人が同世代の読者に伝えようとしたメッセージを、現代語に翻訳された聖書が正確に反映しているという保証はないということである。

古代文献を翻訳する際には、古代の外国語で書かれた原典の著者が伝えようとした内容を、現代語を使う人が読んでも理解できるように言い換える作業をする。単純に言えば、そういうことになろう。しかし考えてみれば、言語の文法体系や語彙の意味領域の相違だけでなく、文書の時代背景と文化的背景が異なっているという事情がある。これらの相違を簡単に乗り越えるのは、決して容易ではない。

実際、聖書が日本語に訳される場合にも、現代の日本語として存在しない概念や日本社会にはない習慣を、どのような日本語に表現できるかが問われることになる<sup>11</sup>。もちろん、そのような概念は補足説明すればいいのだが、翻訳である以上、可能な限り原文の長さに近い分量で表現しなければならない。説明を付け加える必要があれば、注のためのスペースや用語解説の頁を増設して補うことになり、本文の中にそれらを挿入することは極力避けられる。特に聖書の

11 この点に関して、欧米語よりも日本語に訳すほうが困難であるのは言うまでもない。もちろん欧米語であっても、文構造や語の意味領域の差異によって生じる問題を克服しなければならないのは同じである (cf. C. L. Blomberg/ J. F. Markley, *A Handbook of New Testament Exegesis*, Grand Rapids: Baker Academic, 2010, pp. 37-45; W. W. Klein/ C. L. Blomberg/ R. L. Hubbard, Jr., *Introduction to Biblical Interpretation*, 3rd ed., Grand Rapids: Zondervan Academic, 2017, pp. 191f.)。しかし日本の場合は、1549年にザビエルが現れるまで聖書の思想が存在しなかったのであるから、日本の伝統的な思想とは異なる思想を日本語で表現するという意味での困難に悩まねばならないのである。日本語訳聖書の諸問題については、荒井献『荒井献著作集 第10巻』岩波書店、2002年、315-364頁が重要な示唆を与えてくれているので参照されたい。

場合は本文の分量が膨大であるため、注釈付きの版ではなく、本文のみの普及版が主流とならざるを得なくなる。その結果、聖書の読者は二千年前のパレスチナに起きた出来事の物語を読んでいるにもかかわらず、いつの間にか、現代社会に存在する身近なものを思い浮かべてしまうことになりやすい。

たとえば、洗礼者ヨハネが洗礼を授けていたという物語を読むとき、どれだけの読者が現代の教会で行われている洗礼式のイメージを払拭して読めるだろうか。あるいはマタイ福音書の中に教会という訳語が現れるのを見るとき、現代の教会のイメージを払拭し、マタイ福音書が執筆された時代に存在した「イエスに従う人たちの共同体」の様子を思い浮かべることができるだろうか。

マタイ福音書の執筆当時は、まだ確固たるキリスト教の概念が定着しておらず、むしろ信仰の母体であるユダヤ教との関係の中で、自分たちのアイデンティティを模索していたに違いない<sup>12</sup>。ところが翻訳された聖書を読んでも、このような時代状況の考慮に導く注釈がないため、聖書の記述内容がそのまま現代に当てはまるような錯覚を覚えてしまいがちになる。

この問題を解決するために新しい訳語を創作しても読者は理解できないだろう<sup>13</sup>、原音表記では一層難しくなる。解説付き聖書が物理的・経済的困難を伴うことはすでに指摘した通り、普及させることは難しい。このように、訳文の選択に伴う諸問題の解決は難しく、さらなる対策が求められると言えよう。

12 澤村雅史『福音書記者マタイの正体』日本キリスト教団出版局、2016年は、この問題意識を踏まえた論考である。特に、11-17頁を参照されたい。

13 たとえば、かつては「らい病」（口語訳）、「重い皮膚病」（新共同訳）と訳されたヘブライ語「ツアラアト」（旧約聖書）とギリシア語「レブラ」（新約聖書）が、2018年に出版された『協会共同訳』では「規定の病」と訳されているが、一般の読者には意味が分からないであろう。そのため、巻末の用語解説（27頁）において「規定の病」は何らかの皮膚の疾患や、（ユダヤ教の）祭儀的な汚れを示すものであると説明されている。しかし患者たちが差別的な取り扱いを受けていたという説明がないことに加え、「その病の人々をイエスが清められた」として解説を締めくくっているため、あたかも患者たちの汚れをイエスが前提としていたかのように感じられてしまう。「ツアラアト」や「レブラ」という単語にも、「指し示される事柄（病気の種類）」「社会的な位置づけ（ユダヤの宗教法）」「共同体の構成員を価値づけるもの（患者に対する差別的な振る舞い）」といった複数の内容が含まれているのだから、一つの要素に特化した訳語の創作は相応しい解決手段ではないと思われる。

## 2. 2. 聖書著者の意図を汲んだ翻訳の必要性

しかしこうした問題は、たんに事柄のイメージにとどまらず、聖書著者のメッセージ性を理解しようとする場合にも生じることがある。この問題こそが、われわれにとっては重要なので、具体的な例を取り上げて指摘したい。

ギリシア語 *μετάνοια* は、多くの日本語訳聖書で「悔い改め」に類する日本語に訳されているが<sup>14</sup>、はたしてそれは相応しい訳語であると言えるだろうか。日本語の「悔い改め」から連想されるイメージは個人差があると思われるが、基本的な概念としては「悪い行いを反省して改めること」、もしくは宗教的な意味として「神への背きを悔いて神に立ち帰ること」の意として理解されるであろう。

聖書著者の一人であるルカ（『ルカ福音書』と『使徒言行録』の著者とされる）は、この *μετάνοια* を他の聖書著者よりも多く用いている。しかも、この語が物語に登場する罪人と関連して現れるため（ルカ5:32; 15:10参照）、ルカは罪人に対して否定的なイメージを持っている著者であると理解されがちになる。つまり、ルカは罪人に反省を迫って生き方を改めさせるメッセージを語っていると見なされるわけである。確かに、ルカ福音書よりも執筆年代が古く、ルカが参照して取り入れたと見られるマルコ福音書の描くイエスは罪人に対して *μετάνοια* の語を用いることはないし、生き方の修正を迫ることもなかった。むしろ、罪人たちの存在を受容する側面を強く打ち出している（マルコ2:17）。

しかし *μετάνοια* の語に、倫理的・宗教的な反省に基づく行為の修正という意味が込められているわけではない。*μετάνοια* は *μετά* と *νοῦς* の合成語であり、前者は前置詞として用いられる場合は「～のあとに」「～と共に」「～に対して」の意になるが、接頭辞として用いられる場合は「移動」「変化」を表し、後者は「知能」「思考」「理性」「心」を表す。それゆえ *μετάνοια* の基本的な意味は「考えの変更」なのである<sup>15</sup>。

実際、*μετάνοια* の動詞形である *μετανοεῖν* が「考えを変える」という意味で用いられる箇所がLXXに認められる（アモ7:3, 6; ヨエ2:13-14; ヨナ3:9, 10b, 4:2; ゼ

14 この翻訳方針は依然として、『協会共同訳』においても貫かれている。

15 拙著『ルカの救済思想 断絶から和解へ』日本キリスト教団出版局、2012年、147-8頁。

カ8:14; エレ18:8, 10)<sup>16</sup>。いずれも、神が下そうとする裁きを「思い直す」という文脈に現れるので、これらの箇所「悔い改め」という意味の訳語をあてると、神が自身の悪い判断を反省して改めたという理解になり、テキストの元来の意味に不適切な影響をもたらすことになる。

しかし新約テキストのマタイ12:41// ルカ11:32=Qには、ニネベの人々が「悔い改めた（μετενόησαν）」と解釈できる文言があるため、μετάνοιαの運用範囲の拡大が認められる<sup>17</sup>。ただし、この箇所も「ヨナの宣教に向けて思い直した（μετενόησαν εἰς τὸ κήρυγμα Ἰωνᾶ）」と解釈することも可能であるため、「思い直す」という元来の意味が保たれていると解釈することも可能である。

いずれにしても、著者ルカがどのような意図をもって μετάνοια の語を用いたかについては、慎重な考察が必要である。古代ギリシア語に限らず現代文の翻訳でも同じであるが、辞書的な意味を移し替えるだけでは訳したことになる。語が用いられている文脈はもちろんのこと、その語に込められた著者の意図を考慮すべきである。

その点において、ルカが罪人を悔い改めさせるつもりだったのか、それとも何か別の意図があって彼らの認識を変えさせたいと考えていたのかが問われる。しかし、この場で μετάνοια の語に関する問題を解決するつもりはない。本論文の目的は、聖書解釈の障壁となっている問題に立ち向かい、より適切な解釈を導き出し、それを現代人の社会問題に適用させることだからである。ただし、μετάνοια を罪人の悔い改めの意味に理解するためには、以下の困難があることだけは指摘しておきたい。

第一に、ルカが「罪人の悔い改め」という形で罪人に否定的な評価を下しているかどうかを考慮するためには、罪人の対概念である「義人」に対するルカの評価も同時に問わねばならない。つまり、ルカが義人という存在を認めた上で、罪人も悔い改めれば義人になれるという考えを前提しているかどうかが問われるわけである。

16 拙著『救済思想』、150-155頁。

17 拙著『救済思想』、179頁、脚注47参照。

そのような観点でルカ福音書を読むと、ルカが義人を批判的に描いていることが確認できる。ゼならルカは「自分を義とする (δικαιῶσαι ἑαυτόν)」(ルカ 10:29, 16:15, 18:9) という独特の表現を用いることにより、罪人を蔑視する義人たちを自称義人という皮肉な表現で示しているからである<sup>18</sup>。本来的に、人は神によって義とされるべき存在であるから、自分で自分を義とすることはできない。この点についてはルカも、その当時に罪人視されていた徴税人が神によって義とされたと語ることによって指摘している (18:14)<sup>19</sup>。それゆえルカの批判の矛先が罪人ではなく、自称義人に向けられていることは明らかである。

第二に、「罪人が悔い改める」といった場合には当然、人間が悔い改めを行為するという理解になる。ところがルカは第二の著作である使徒言行録において μετάνοια を神から与えられるものとして描いている (5:31, 11:18)。つまりルカは μετάνοια を神からの恩恵と考えているのである<sup>20</sup>。

しかもこれとの関連で、使11:18に至る文脈では μετάνοια が、イスラエルの民に財産を提供していた信仰心あるコルネリウスに対して与えられたとされている (使10:2, 31参照)。もしも μετάνοια が「悔い改め」を意味するならば、コルネリウスはどんな罪を反省して悔い改めなければならないと考えられていたかが問われなければならないだろう。

それゆえ μετάνοια に限らないが、聖書に現れる中心概念を示す語については、聖書著者の神学思想に相応しい訳語を選択しなければならない。その作業を怠れば、テキストのメッセージをつかみ損ねるだけでなく、場合によっては正反対の思想を読み取ってしまうことになる。

もちろん、聖書に特有の神学概念がわれわれ現代人の社会に存在しないがゆえに、相応しい訳語を見つけれないことがある。その場合は苦肉の策であるが、

18 拙著『救済思想』128-132頁。

19 「義とされて (δεδικαιωμένος)」という受動態には、神が人を義とするとの暗示がある。これを神的受動態 (Divine Passive) と言う。

20 拙著『救済思想』44-45頁。G. D. Nave は、古代ギリシアの文献における類似の表現を紹介しているが、いずれも「(神的存在が) メタノイアの時／余地を与える」としている点で、使徒言行録と一致するものとは言えない (cf. G. D. Nave, *The Role and Function of Repentance in Luke-Acts*, Academia Biblica 4: Leiden: Brill, 2002, p. 65)。

新しい訳語を創出するか、すでに存在している類似概念の転用を迫られることになる。すでに普及している聖書には、こうした努力の末に選択された訳語が用いられている。それゆえに、われわれは聖書翻訳の中に現代人読者の誤解を生じさせる問題が常に含まれていることを意識しなければならないのである。

### 3. 前編の結論

21世紀となった今も、古代のヘブライ語とギリシア語で書かれた聖書は、現代語に翻訳されて世界に普及している。印刷された書物だけでなく、デジタルコンテンツとしても急速に拡大していると言ってよい。だから聖書は、われわれ現代人にとって手軽に読めるものであり、数千年の時代格差や文化の相違等を意識せずに読めるようになったと考える人もいるのではないだろうか。

しかし本論において考察したように、古代人が想定していた概念を現代人が理解するのは、それほど容易ではない。単語一つ一つにも歴史的な背景とそれに伴う意味があり、その単語を使用する著者もまた、それを通して伝えるべき独自の意味を想定している。このような複雑な事情を翻訳だけで示せると考えることはできない。われわれは、遠い過去の時代の人々のメッセージを現代人が受け取ろうとする際に生じる多大なる困難に向き合わねばならないのである。

ところで、聖書のメッセージを現代の社会的諸問題に適用させようとする際に、この問題はどれくらい意識されているだろうか。人類の存続を脅かすような様々な種類の社会問題を前にして、聖書を生み出した古代社会の問題を追及することが、何か無意味な作業のように考えられてしまうことはないだろうか。細かい部分の解釈はともかく、聖書の中心的なメッセージは押さえてあるのだから、あとは現代社会の問題に適用させるだけでよいと考える人がいるかもしれない。

しかしわれわれは、現代の社会問題を考えるためのヒントを必要としているからこそ、逆に、古代社会から発せられるメッセージを忠実に聞き取る努力をしたいのである。そのためにも序において述べたように、われわれが現代人として前提としている社会状況と、それに伴う人間理解や様々な価値観や倫理観

を一旦わきに置き、なるべく素のままで古代人のメッセージを聞く必要があると考える<sup>21</sup>。

これを逆に考えて、もしもわれわれ現代人の思想が古代のそれよりも優れているということを前提とするならば、あえて聖書を読む必要はないことになる。われわれが最善と考える思想によって諸問題に向き合えばよいだけの話だからある。われわれの判断を正当化したり、権威づけたりするために聖書を持ち出す必要はない。むしろ、そのような行為は慎むべきであろう。

しかしわれわれが、聖書が生み出された時代の声を聴くという姿勢で聖書を読むならば、こうした権威化から解放されるばかりか、聖書を相対化し、聖書と対話する姿勢になるだろう。時代の声である限り、そこには有益なことばかりではなく、問題も含まれているはずだからである。それゆえ繰り返しになるが、原典聖書の内容が現代化されてしまわないように読むことを提案したい。そして古典テキストからの声が聞こえてきた時に始めて、われわれはそれに対する応答について考慮したいのである。

そこで後編となる次回では、聖書のメッセージを汲み取るために必要とされる聖書的概念への集中、さらに聖書文書の物語としての統一性を意識した解釈について論じたい。その上で、聖書のメッセージの普遍的側面を明らかにし、それを現代社会の問題に適用する方法について論じる予定である。

---

21 この点に関して N. T. ライト『新約聖書と神の民 上・下巻』（山口希生訳）新教出版社、2015年（上）、2018年（下）は、自ら提唱する新約聖書解釈の方法として、聖書テキストを構成する要素であるイスラエルの世界観を把握する必要性を説いている。つまり「この作業には、1世紀のユダヤ教とキリスト教の歴史的再構築が含まれる」（同書、上71頁）というのである。また同時にライトは、歴史の舞台で活躍した登場人物たちの思考回路を解明するために神学を用いることで（上253頁）、テキストに含まれている様々なストーリーを抽出する必要があると述べている。しかしライトの手法は従来の歴史研究にとどまるものではなく、これらの研究に統合する形で文学批評を取り入れている点に特徴がある。聖書テキストを物語として読み解く場合にも歴史的視点が必要であるというライトの主張を支持し、われわれの解釈モデルを構築したい。

※以下は、当該論文の後編として予定している項目である。

4. 聖書のメッセージの抽出

4. 1. 聖書の時代背景への集中—現代的先入観の排除

4. 2. 解釈対象文書全体との整合性

4. 3. 普遍的メッセージの抽出

4. 4. 現代社会の諸問題への適用